essais こころみ　2024年7月

2024年7月1日（月） 雨

梅雨本番、一昨日土曜の日中に晴れたのはさいわい、また昨日から雨。さすがに蒸し暑く、今朝は事務所に着いたと同時に冷房をいれた。今日から7月、7日は小暑。夏本番にも入り、月末にかけての体調管理、さらに重要。

— ふりかえり、心づもり —

今年も半分すぎた。いつもながら、あっという間に時間はすぎる。プライベートで一つ大きなタスクがある。今年実行するつもりだったが、「諸般の事情」が許さない。

“自然の成り行きにまかせるのも、また一つ”と自分にいい聞かせてみて、頭をよぎる、『「割り切り」とは魂の弱さである』（亀井勝一郎）。なかなか厳しいお言葉。

ふり返ってみると、今年前半はプライベートで例年と違う変化があった。大きなタスクはこのまま来年に持ち越しになりそうだけど、祝福ごとが一つあった、きょうだいに。これでチャラと考えようか。

むこう半年、年末までの仕事の予定はある程度きまり、だいたいの流れは読めるが、プライベートもふくめ、想定外のことはいつでもあり得る。暗に心づもりできるようになって久しい。

実際どうであろうか。もしあり得るとすれば…、今のところ2つのことが思い浮かぶ。念頭には入れておいて、観察の目を持つようにしよう。何もなければそれに越したことはない。

さて半年後の年末にはどうふり返っているだろう。

2024年7月3日（水） 曇→晴

窓から見えるのは隣のビルのオフホワイトの壁、そこに太陽が照り、反射光が眩しい。さぞかし外は蒸し暑い、早めに買い物に出ていてよかった。大阪は33℃まで上がるらしい。今日はあまりムリしない方がいい。

— 中間地点 —

6月の終わりの段階での「残り半分」感と、7月に入ってからの感覚が変った。残り感が一気にくる。そのせいか、9月まで用意していた月間日々メモのフォームを12月分まで作った。

常時3ヶ月分を見渡せるようにしてあるが、さらに3ヶ月足して、年末までのざっくりとした予定を仮書きして、7月から12月、12月から7月とゆっくりと眺める。しだいに来年のことも視野に入ってくる。

目の前の仕事は、どうあれ頭もカラダも動かざるを得ないが、いわゆる「戦略的業務」は、『日常業務は戦略的業務を駆逐する』。目に見えるようにいても、ハードルが予想されることならなおさら、いやいや、そもそも戦略的業務はハードルを伴うのが常であるから、〈腰が引ける〉。

時にはそれが本当に必要かどうかを自問する。実際は心からは望んでいないことだったりすると、当然、気は進まない。考えあぐねて、最終的に削除したものもある。

その判断はそれでよしと考えるしかない。未来に訪れる出来事や現象は違ったものになる可能性はあるが、何がどう自分に跳ね返ってきても、あるいはそれほど変らなくても、すべては自分の問題。

今年も残り半分ということで、そんなこんなことをつらつら考える。中間地点の休憩場、態勢維持の息継ぎのようなもの。

2024年7月5日（金） 晴

まるで梅雨明けしたような青空、日の出の時点で今日の猛暑を知らせる陽ざし。屋外で仕事する人は危険。昨夕のニュースで公園の清掃をする女性へインタビュー、視聴するこちらの居心地すこし複雑。

― 自然 ―

昨朝、“うん？ セミ？”。耳を澄ますと、たしかに蝉の声。まだ声ならしの感じで、すぐにやんだけど。

3月の下旬から、自然音を聴いている。動画サイトにたくさんアップされているし、専門サイトもあった。ラジオ番組や音楽とはすっかりご無沙汰。

事務所では朝からずっと流している。仕事の集中を誘うわけではないと思うけど、寄りそって伴走or伴奏してくれるような…。生の音でなくても、それなりに効用はある。

ちなみに、カナダの大学の研究によれば、「鳥のさえずりはストレスといら立ちの軽減に最も効果的な一方で、水の流れる音はポジティブな感情や健康増進に最も効果的であった」とか。

なぜそうなのかと問われて研究者が語ったのは、中井先生のいう「太古からのリズムがひそんでいる」という話につながる。人間は自然の音や環境をよしとするように出来上がったよう。

だから経験的にわかる自然のもつチカラを。ただそういう機会がないと学べない。『あなたの子どもには自然が足りない』（リチャード・ループ）という本があるらしい。

『沈黙の春』の「レイチェル・カーソン」は、『子どもを自然の世界に紹介する時、知ることは感じることの半分も重要ではない』と言ったという。大人がうまくリードしなければ…。

生まれ育った環境そのものが自然がいっぱいなら、どうだろう。進路にもけっこう影響していることは科学者などのプロフィールでよく知るところ。

今からもう20年以上前、夏本番の7月末に信州・木崎湖へ旅したとき、眼前にそびえる山々を見ながら思った、“こういうところで生まれ育ったら、もう都市には住めないなぁ…”。

都市で生まれ育ったから、旅から帰ってこられたものの。

2024年7月8日（月） 晴

先週後半からほぼ猛暑日の気温、梅雨の晴れ間というには暑すぎる。できればあまり動かず、体力を維持したい。ということで昨日、家のそうじも簡単に済ませた。「無理は禁物」と言い訳をして。

— 心くばり送り —

今朝話した6日の「大失敗」のことを少し掘り下げてみよう。「拠点ゼミ」の開始時間前、今回は車座でのセッションだから、椅子が円形に配置され、会場へ入ってきた参加者は好きな席に順に座っていく。その頃合いにこちらから声をかけたり、話しかけたりしている状況だった。

そこへ旧知の参加者が入ってきて、すぐ傍にきて、何かをそっと、控え目な声で「・・・食べてください」と手渡してくれた。一見し、和の包装紙と大きさ、厚みから、どら焼きのようなものが3つほど入っている感じがした。中身が何かは見えなかった。

だからてっきり個人宛と思い込んだ。あわてて自分用の演台にそれを置いた。「食べてください」の前の部分が、頭に入らなかった。小声だったこともあるが、こちらの方が言葉を捉えられなかったのだと思う。

早めに着いた参加者、順次入ってくる人などに気に向いて、とられていて、聴覚が広い音をひろい、ピンポイントの言葉を捉えにくくなっていたのではないか。

帰りがけに、たぶんご本人はこちらを気づかって、小声で〈想定外〉だったことを話されたようだったが、この時もまた順次帰る他の参加者の人たちのことにも気をとられて、しっかり聴きとれずじまいだった。

これらに気づいたのは、事務所に戻ってお土産の袋をあけてからのことだった。どら焼きなどではなく、洋のチョコレートだった。それも個装してあって20個ほど入っていた。

“うん…?、あぁ…!”。ゼミの開始前、終わって帰りがけに小声で話されたことが、「みなさんで」だったのか!と気づいたのだった。まさかこの包装紙から中身がチョコとは…。

何ごとも些細なことが結果を左右することが多い。せっかくの心くばりを台無しにしてしまったのは大失敗。すぐさまお詫びをして、相手は変るが他のみなさんへ、「恩送り」ならぬ、「心くばり送り」をしよう。

2024年7月10日（水） 曇り

ようやく曇り空、先週後半からの猛暑晴れはひどかった。近畿は今のところ雨が少ない。でも日本海側は今日も猛烈な雨。知人が何人かいるので、顔がうかぶ。被害のないことを願うばかり。

— 謎解き —

「私がどのようにして今の私になったかは、私にとってはささやかとはいえない謎でありつづけた」と、60代半ばになっても「中井久夫」がいう。

“ワタシは何故こういうワタシに出来上がったのか…”と最初に自分に問うたのは1995年の初夏だった。解く手がかりはやはり本がてっとり早い。図書館で一日すごす休日が何度もあった。

よい本に出会ったおかげもあって、答えは得られた。過去の出会いの意味合いが刷新された。あらためて頻繁に音信をとるようにもなった。その過程でまた学ぶことがあった。

しかし、中井先生にして「謎でありつづけた」と言わしめるほど、そんな簡単に答えが得られるものでない。今も何かの折に、なぜワタシはこうなんだろうと頭の中でつぶやくことがある。

人の出会いが謎解きの中心であることは間違いないのだけど、10年ほど前から存在感を増してきたのが、読書。

読んできた本が精神糧になっているとは自覚はしていたけど、その度合は想像を絶するほどではないかと数年前から感じている。知らずしらず精神の糧になり、感性の働きの素になっていた…。

他にも、両親のあり様をはじめ、謎解きのタネがいくつかある。数日前のニュースに、「約133億年前の宇宙に球状星団の祖先の星団発見」というのがあったが、人間個人の過去も宇宙のどこかに存在していないか？

それはないとして、生きるというのは自分を知る旅なんじゃないかと時々言っている。これはまったくの実感であって、けっして感心をねらってのことではない。謎解きが続くから、人生たのしいともいえる。

2024年7月12日（金） 雨→曇

昨夜は久しぶりにクーラーなしで眠れた。今朝も気温が低めでラクに出かける準備ができた。なんとなく気分も軽やか。この差は大きい、生活の質にかかわる。来週末には梅雨明けの予報、夏はまだこれから。

― 野心 ―

何かしら思考をめぐらすきっかけは大抵、外からやってくる。人や出来事を見聞きして、それが尾をひき、自分の中で対話する。

「野心」という言葉が頭をもたげる。野心、時にはあまりいい意味でとらえられないけど、こういう〈知ってるつもり〉の言葉ほど辞書を開いてみるのがいい。

「野心」とは、1 ひそかに抱く、大きな望み。また、身分不相応のよくない望み。野望 2 新しいことに取り組もうとする気持ち。

2.の意味合いからしてやはり、〈適度〉な野心が自分の潜在能力を引き出すことは間違いない。

「野心」とくれば、「大志」。これは「大きなこころざし。将来に対する遠大な希望」。似た概念だけど、野心には情性あるいは野性、大志には理性から発しているような…。

ちなみに、情とは、1 物に感じて動く心の働き。感情 2 他人に対する思いやりの気持ち。なさけ。人情。3 まごころ。誠意 4 意地、他。
野性とは、「自然のままの性質、本能のままの性質」

こう書いて調べてみると、自分には野心がない思っていたことが、そうでもないように感じられる。大志ではなくて、志はあるつもりでいるから。

じゃその志はというと個人的には、理性はともなっていても、情的で野性に端を発した、自然のまま、本能のままからのものという気がする。ということは、志よりも野心方がの合っていそう。

結果的に、野心がないわけではないと思いなおした、今日の〈書く〉。

2024年7月16日（火） 曇

7月も半ば、今週後半には梅雨明けの観測。ひと月つづく祇園祭も佳境、来週は天神祭。そうこうするうちに8月。8月7日は立秋。

— 夏 —

夏は思い出のできる季節。子どもには長期の夏休み、大人も一週間程度の夏季休暇で、大なり小なり旅をして、余暇をたのしんで、時間が経ってから、自分史の小さなエピソードになっている。

幼い頃の思い出の場所を懐かしむ、それは誰でもよくある。でも大人になってからわざわざそこへ出かけるというのは、たぶん少ない。そこには特別な理由、想いがある。

センチメンタル・ジャーニーという言葉があるけど、そういうものではなく、家族史または自分史フィールドワークというか、たしかに存在した人と場面を脳裏に再現して、天を仰ぎ、あいさつ。

「アジアの人は夏に郷愁をおぼえる」。20数年前に大学教授の知人がそんなことを教えてくれた。誰の説かを尋ねればよかった、音信がたえて久しい。

それにしても、なぜそう言われるのだろう。お盆の行事があるからか？ちょっと調べてみた。あながち的外れではない感じもした。ともあれ、夏のつかの間、ノスタルジー。

2024年7月18日（木） 晴れ

大阪府に熱中症警戒アラート、今日にも梅雨明け宣言か、早朝から蝉が元気に鳴く。強い陽ざしは目にも堪える。サングラスおすすめ。

— 読書記録 —

図書館で借りている『アリアドネからの糸』の試し読みを始め、昨日からのエッセイは著者の小学生の時の読書について。超人の読書は凡人とどう違うのか、たのしみ。

それなりに読書はしてきても、「本が好き」と心から言えない。なぜだろう、子どもの頃から読んでいたわけではないからか？ 年上の知人がいつか言った、「あとどれだけ読めるかと思うと、気持ちがあせる」という感覚は全くない。

「本ならいくらおカネを使ってもいい」と父が言った言葉は今もその光景とともに、はっきり憶えている。そういう割には、買って与えてくれたわけではなかった。そのうち当の本人は早々にあの世へ逝ってしまったから、責めることもできないが。

代わりに別の大人が読書のきっかけを作ってくれた。多感な頃にかよった塾の読書会に、自分から希望してではなく、ほぼ無理矢理に入れられた。でももしこれがなかったら、読書に親しむ人生になったかどうか…。

そう、あまり考えたことなかったけど、大きな転換点だったともいえるかもしれない。読書してきた人が皆いっているように、読書をとおして人間や社会というものを予習した。自分が社会人になって、腑に落ちることが多々あった、過度な期待も落胆も持たずに済んだ、と思う。

過去のノート類は今から17年前に大半を処分した。残すことにしたのは、この十代の頃のものだけだった。その時に自分なりに覚った、人の一生の大事な部分は初めと終わりではないか、と。

中間部分は社会の第一線で働いている時期だけど、だからか、他者が自分を持ち上げてくれて、そのつもりはないけど有頂天になって、自分の根っこの部分をどこかに置いてきている、そんな風に見返った。

十代の頃のノートは残したければ、中を見るのは、腫れ物に触るような感覚があり、やめた。5年ほど前、片付けの時に、ふとその気になり、おそるおそる一冊を開いた。

あぁぁ、われながら目をみはった。それは読書記録だった。今につながる過去がそこにあった。

2024年7月22日（月）大暑 晴れ

昨夜は満月だったが、そんな風流な気にならない。あまりの猛暑に身を危険を感じた。今朝も陽がのぼり始めた段階から熱中症を心配する暑さ。『猛暑は災害』とは、たしかに。

— 心の安定に —

十代の頃、通っていた塾の先生陣の一人から、「敏感なのか、鈍感なのかわからない」と言われた。大人になっても鮮明におぼえている過去の場面や言葉は、間違いなく本質を突いている。それがわかってくる。

ある程度のところまではセンシティブだけど、いざという時には鷹揚にも太々しくも構える。おそらく、元々の性質にそういう面がある上に、早く逝った父の後の混沌で人間の様を早いうちに見たということもあるだろう。

それでも今の社会の第一線で働かずに済んでよかったと時々おもう、当の人たちには申し訳ないが。「メンタルをやられる」という言葉が普通になった社会、たぶん、こんな自分でも、やられる。

2010年5月に出た『私の日本語雑記』の中に著者の一言に、すごく頷いた。『今を生きる人間は、一種の食物連鎖のようなものをつくりだしてしまったのではないだろうか』（中井久夫）。

だから仕事を通して出会う人たちに必ずいうようになった一つ、心をいかに安定させるか、それが大事と。自分一人ではなかなか難しいから、心から話せる人や場を持つといい。

今年4月にこのサイトを見なおして、「ご案内・相談」のメニューをつくった。既知の人には「話せる人」とみとめてもらっているはず。何か自分のことを話したくなった時にはいつでも電話をどうぞ。

2024年7月24日（水）土用の丑　曇

昨夜9時半頃だったか、東の夜空に昇りはじめた大きな月がみえた。久しぶりにみた。あまりに暑すぎて、そうそうに窓を閉め切るから外へ気が向かない。今日は土用の丑、滋養のあるものを食べて、意気をあげよう。

― 尊敬できる人がいる、いない ―

ときどき昔の問答を思い出す。事務所を開設して3年ほど個人的に、「青天の霹靂」の時期だった。自他ともに〈新発見〉することになった分、エピソードが色々をある。その一つが「尊敬できる人」がいる、いない、の話。

診断士受験の学校で一緒だった人が事務所を訪ねてきた。まだ合格していなかったから、何をするのか興味があったのだと思う。室内を眺めまわして、ランチに誘われ、レストランの席につくなり、「どう、調子は？」。

どうって、まだ始めたばかりなので、「別に、マイペースでやってます」と答えた。すると、「それは、羨ましいなぁ、尊敬はできんけど」。

尊敬？ そりゃ、そうだ、尊敬できる人かどうかを量れるほどの付き合いは無いですもんね、という感じで、ふと、じゃ、「尊敬できる人ってどんな人ですか？」と口をついて出た。ほんの素朴な疑問であった。

しばらく間があった。「いないなぁ」。いない…？ 「尊敬できる人がいない…、それっていいことなんでしょうかね」と、また素朴な疑問がわいた。また、間があった。

けっきょく最終的には「いる」という話になったが、この経過を聞いた人の大半が、最初の段階で「尊敬できる人ってどんな人ですか？」と聞き返したこと驚く。相手は、自分の言ったことに機嫌をわるくして、喧嘩を売ってきたと思ったはずだと。

機嫌をわるくするなんて全くなかったから、そう指摘されて、全否定。ひょっとすると相手も瞬間はそう取り違えたかもしれないが、話すうちに単純に尋ねているのだとわかってきたのだと思う。

このとき、尊敬できる人がいないのは何故よくないかを自分なりに話した。でも何を言ったか憶えていない。憶えていないほど、はっきりした答でなかったからだと思う。

今でもはっきりはしないが、何よりもたぶん、「尊敬できる人がいる」というのは、人としてどうあるべきかの問題意識をもっていることの表れではないか。ある意味、謙虚さの上にそなわる意識ともいえる。

「尊敬できる人」がモノサシにもなり、自分を律し、自分に努力を課すことになる。それが遠い存在であって、身近にいる人であってもいい。たぶん、大抵は両方。

それはさておき、あの時のあの問答の人は、実際のところ、何をどう感じていただろう。あのあと先方から連絡がくることはなかった。

2024年7月26日（金） 晴れ

暑さに少し慣れた感じはするが、危険な暑さが続く。NHKのサイトに「お得なエアコンの使い方」が紹介されたいた。温度をあげたら、風量を強くすると体感的に涼しくなるとか。ざっそく昨夜試して、“たしかに”。

―「精神の顎」―

小学生で『地球の地質学』（創元科学選書）と『天体と宇宙』（山本一清）を読み、「この二冊の堅い本を読み砕いてゆくのは私の〈精神の顎〉にとって一種の快感であった」という「中井久夫」。

そんな感覚の足元ぐらいは何度か経験している。昔は背伸びして本を読むのが若者の手習いみたいなものだった。個人的には、自分を叱咤激励しながらドストエフスキーを読んだのが印象にのこっている。

この時は顎を働かせるより前に口の中が一杯でどうにもこうにも砕きようがないといった感じ。ときどき頭をふりふり、目をぱちぱちさせ、文庫本にむかっている自分がみえる。快感まではいかなかった。

やはり自然に気がむくもの、好きなものの範疇で堅い本であったときに精神の顎がよくはたらき、快感にもなるのではないか。2010年から3年ほど独学した時、快感というか開眼というか、知ることの心地よさを実感した。勉強の内容が自分にとってすごく馴染むものだった。

「わからないものに関心を集めているときには既に情的にはわかっている。情的にわかっているものが知的にわかる。それが発見」（岡 潔）。

なぜかしら関心がむく、馴染む、好む、そういったものが人ごとにあって、それを探究できれば、『好きこそものの上手なれ』、堅いもの、歯が立たないことにもアプローチできる、する。

それにしても、「精神の顎」とは、絶品の表現。

2024年７月29日（月）　　クレオ大阪中央館の休館日開館事業へ

午前の「本の持ち寄り会」へ参加した後、午後の「編集者に学ぶ!」へ。参加者の中には知ったお顔がチラホラ。終わってから挨拶をかわしながら、感想を話し合いました。

著名な執筆者たちの「あとがき」に必ず名前が登場して、形式的ではない、信頼感のにじみでる感謝文がそえられる編集者の方だけあって、率直な語りが印象的でした。

そして偶然も一つ。聴き手からこれまでで一番印象に残っている担当本を尋ねられて挙げたのが、なんと、聴き手の方が大学生の時に読んだ本だった。両者ともに、驚きの表情。こういうこともあるんですね。

2024年7月30日（火） 晴れ

先日の暑さに閉口、スマホの天気予報をみて、またまた閉口。明日は37℃、木曜と金曜は38℃、土曜にいたっては39℃！ ほんとうに危険な暑さ、気をつけよう。

— 微なるかな —

昨日参加した『編集者に学ぶ!プロデュース能力開花のコツ』での話の一つに、「見えないものを、みる」があった。人でいえば、人間性や感性を、どうやって読みとっているのか、人間は。

言語化はなかなか難しい。だから中井先生がいうように、「雰囲気」や「感じ」ということになる。人についていえば、まずは全体の雰囲気、挨拶する時の表情や声のトーン、話しだした時の語りの速度や声の調子、語り口。その他、諸々が微妙に関係して、「そんな感じがする」となる。

個人的には、セミナーでグループディスカッションをする場合などのグループ分けに、受講者たちの「雰囲気」や「感じ」を反映させているかもしれない。セミナーが終わってから、「あのグループ分けはどういう基準で分けられたのですか？」と受講者に尋ねられることが時々ある。

3つぐらいの基本的な基準はあるが、あとは、メンバー間のバランスをみながら、決めていく。だから案外時間をかけている。たかがグループ分け、されどグループ分け、構成しだいで建設的な議論になるかそうでないかが分かれるから、大事な事前作業。

心がけの中でも特に大切におもうことは紙に毛筆ペンで複数書いて、いつでも見られるようにスマホや手帳のポケットに入れている。『老子』と『孫子』の個人的な極めつけも一篇ずつ、同じようにしている。

『孫子』の虚実篇その二の後半部分の核心を紹介しよう。攻めて必ず勝利を治めるのは敵が守っていない所を攻めるからであり、守って守り通せるのは敵が攻めてこないところを守るからであると説いて、

故に、善く攻むる者には、敵 其の守る所を知らず、
善く守る者には、敵 その攻むる所を知らず
微なるかな 微なるかな 無形に至る
神なるかな 神なるかな 無声に至る